

漱石全集
第二十四卷

日記及斷片
上

全三十四卷 第二十四回配本

昭和三十三年五月十三日 第一刷發行 ©

漱石全集 第二十四卷

定價 一五〇圓

著 者 夏 目 漱 石

東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地
發行者 岩 波 雄 二 郎

東京都青梅市根ヶ布三八五番地
印刷者 山 田 一 雄



發行所

東京都千代田區
神田一ツ橋三ノ三 株式會社

岩 波 書 店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

精興社印刷・永井製本

目次

斷片	(明治三十二年頃)	三
日記	(明治三十三年九月八日より十二月十八日まで)	五
斷片	(明治三十三年十月)	一八
日記	(明治三十四年一月一日より十一月十三日まで)	二四
斷片	(明治三十四年四月頃以降)	六四
斷片	(明治三十七八年頃)	七七
斷片	(明治三十八年十一月頃より明治三十九年夏頃まで)	一九
斷片	(明治三十九年)	一五〇

日

記

(明治四十年三月二十八日より四月十日まで)

一八七

斷

片

(明治四十年頃)

一九六

解

說

二三

注

解

二四三

斷片

——明治三十二年頃——

心ハ喜怒哀樂ノ舞臺 舞臺ノ裏ニ何物がある
煩腦原と眞如は紙の表裏の如し 二而一一而二

天下ノ事皆面白シ而シテ皆面白カラズ金時計ヲ持シ
テ威張るハ弊袴ヲ着テ威張ルガ如シ、學問ヲ誇ルハ無
學ヲ誇ルガ如シ

同時ニ善ナリ同時ニ惡ナリ

或る學校ノ教師ハ無暗に休席ス生徒不平なり他教師
は一日も缺席せず生徒亦不平なり一見矛盾の如し然し
是が人情なり反對せるもの各其良き所あるを示す所以
なり

新を好むの心は舊を戀ふの心なり現在に満足せざる

は人情也

老人は新を好むの餘地なし故に舊を好む少者は戀ふ
べきの舊なし故に新を好む

天地は此情を満足せしむる様に作爲せられてあり夏
に苦しんで冬を得冬に困てして春秋に遭遇す

歴史を己原れを繰返すと繰返すものは歴史のみならず
日ありて夜あり闇の後に月あり天下變ぜざるなし時
々に變じ刻々に移る變化推移を好むは人情なり

變化なき是を死といふ不變化を愛するは死を愛する
也彼實に不變を愛するにあらず變化の窮りなきを見て
不變化の安かるべきを思ふ是妄想なり春日樂しと雖も
三百六十五日春のみ〔に〕して寸毫の變なきときは五六
年の後人皆秋霜冬雪を戀ふに至らん金錢貴しと雖豪奢
を極め盡すときは江湖蓑笠の樂なる事を憶起すべし
不變既に樂しからず變亦樂しからず氣むづかしきは
人間なり

變にして不變不變にして變なるものを求めよ而して

海は始終大安樂なるべし

無意味と無意味は衝突する事なし

自ら以て高しとす是自ら卑しとするなり自ら以て得たりとす是未だ得ざるを示す

日 記

明治三十三年九月八日
——より十二月十八日まで——

兩氏及池田氏送ラル

夜月色頗ル可ナリ

八日〔土〕 横濱發遠洲洋ニテ船少シク揺ク晚餐ヲ喫スル能ハズ

九日〔日〕 十時神戸着上陸諏訪山中常盤ニテ午餐ヲ喫シ溫泉ニ浴ス夜下痢ス晚餐ヲ喫セズ

十日〔月〕 夜半長崎着

床上ニ困臥シテ氣息奄々タリ直徑一尺許ノ丸窓ヲ凝視スレバ一星窓中ニ入り來リ又出デ去ル船ハ波ニ從ツテ動搖スレバナリ

十一日〔火〕 長崎上陸縣廳ニテ馬淵鈴木二氏ニ面會ス筑後町迎陽亭ニ至リ入浴午餐ヲ喫ス四時半歸船

十二日〔水〕 夢覺メテ既ニ故郷ノ山ヲ見ズ四顧渺茫

タリ乙鳥一羽波上ヲ飛ブヲ見ル船頗ル動搖食卓ニワクヲ着ケテ顛墜ヲ防グ、

漸ク動搖ニナレテ氣分少シハヨシ、長崎ヨリ西洋婦人夥多乗込ム皆我ヨリ船が強キ様ナリ羨シキヲナリ、彼等ハ平氣デ甲板ニ居ル婆サンモ若イノモ、特ニ佛人ノ家族ニ六七歳ノ小供ガ居ルガ御玩弄ノ蒸氣船ヲ引張ツテ甲板ヲ馳ケ廻ツテ居ル、我々モ可成平氣ナ顔ヲ装ツテ居ルケレドモ眞ニ平氣ナノハ芳賀位ノモノデ他ハ皆左程平氣デモナイノデ〔ア〕ル其内デ尤モ平氣ナラヌノハ小生デアル

カバンノ中ニ几董集ト召波集ガアツタカラ少シ讀マウト思フタガ讀メヌ周圍ガ西洋人クサクテ到底俳句杯味フ餘地ハナイ芳賀ハ詩韻含英杯ヲヒネクツテ居ルガ

是モ何モ出来ヌラシイ俳句モ一二句ハ作ツテ見度が一
向出テ来ナイ恐入ツテ仕舞ツタ

横濱ヲ出帆シテ見ルト右モ左モ我々同行者ヲ除クノ
外ハ皆異人バカリデアル其中ニ一人日本人ガ居タカラ
是ハ面白イト思ツテ話ヲシカケ〔テ〕見タラ驚イタ香港
生ノ葡萄〔牙〕人デアツタ神戸カラモ一人日本人ガ乗タ
ト思ツテ喜ンデ居ツタラ是モ豈計ランヤ組デ支那人女
ニ英^原ギリスノ男ガツガツテ出来タ相^原ノコデアツタ是カ
ラ先モ氣ヲツケナイト妙ナ間違ヲシ〔テ〕シクジルヲガ
アル注意々々

十三日〔木〕 味爽吳淞ニ着ス濁流滿目左右一帯ノ青
樹ヲ見ル、夢ニ入ル者ハ故郷ノ人故郷ノ家醒ムレバ西
洋人ヲ見蒼海ヲ見ル境遇夢ト調和セザルヲ多シ
小蒸瀛ニテ濁流ヲ溯リ二時間ノ後上海ニ着ス、滿目
皆支那人ノ車夫ナリ

家屋宏壯横濱杯ノ比ニアラズ

税關ニ立花政樹氏ヲ訪フ家屋宏大ニテ容易ニ分ラズ
困却セリ

東和洋行ヲ教ヘラレテ此ニ午餐ス、立花至ル
立花ノ家ニテ晚餐ヲ喫シ公園ニ到リ奏樂ヲ聞ク
夫ヨリ南京町ノ繁華ナル所ヲ見ル頗ル稀有ナリ

十四日〔金〕 愚園張園ヲ見ル愚園頗ル愚ナリ、支那
人ノ轎、西洋人ノ車雜多ナリ

午後三時小蒸瀛ニテ本船ニ歸ル、就寢、支那人ノ聲
毛唐ノ聲荷ヲ揚ル音ニテ喧騒窮ナシ、

十五日〔土〕 今日ハ上海ヲ出帆スル日ナリ昨日ヨリ
吹キ暴レタル秋風ノ黄河ノ濁流ヲスクヒ揚ゲテ見ルモ
悽ジキ様デアル檣頭ニカ、ゲタル白地ニ錨ヲ黒ク染メ
ヌキタル旗ヲ吹キチギル許リニ吹ク、十時頃ヨリ雨サ
ヘ加ハリテ甲板上ニ竝ベタル籐ノ椅子ヲ吹キ吹^原バス許
ナリ是等ハ皆潮水ニ濡レテ腰ヲカクベクモアラズ且腰

ヲカケタリトテ人間サヘモ洗ヒ去ランズル勢ナリ

十六日〔日〕 昨日出帆スベキ筈ノ船ハ遂ニ出帆セズ
シテ今日始メテ出ツ船ノ動搖烈シクシテ終日船室ニア
リ午後勇ヲ鼓シテ食卓ニ就キシモ遂ニスーヅヲ半分飲
ミタルノミニテ退却ス

十七日〔月〕 船福州邊ニ碇泊ス昨日ノ動搖ニテ元氣
ナキヲ甚シ且下痢ス甚ダ不愉快ナリ

午後四時頃福州ノ砲臺ヲ左右ニ見テ深ク灣ニ入ル
夥多ノ支那人雜貨ヲ持チ來リテ之ヲ賣ル喧噪極リナ
シ

風呂番兼奏樂ノ隊長售リニ來ル支那ノ古服ヲ着ケテ
得々タリ

十八日〔火〕 曇風ナク波平ナリ

左右島嶼ヲ見ル腸胃少シク舊ニ復ス

終日雨 甲板濡ヒテ心地惡シ

十九日〔水〕 微雨尙已マズ 天漸ク晴レントス
阿呆鳥熱き國ヘぞ參りける

稻妻の碎ケテ青シ浪ノ花

午後四時頃香港着、九龍ト云フ處ニ横着ニナル是ヨ
リ香港迄ハ絶エズ小蒸氣アリテ往復ス馬關門司ノ如シ
山嶺ニ層樓ノ聳ユル様海岸ニ傑閣ノ竝ブ様非常ナル景
氣ナリ、十錢ヲ投ジテ香港ニ至リ鶴屋ト云フ日本宿ニ
至ル汚穢居ル可ラズ食後 Queen's Road ヲ見テ歸船ス
船ヨリ香港ヲ望メバ萬燈水ヲ照シ空ニ映ズル様綺羅星
ノ如クト云ハンヨリ滿山ニ寶石ヲ鏤メタルガ如シ di-
amond 及ビ ruby ノ頸飾リヲ滿山滿港滿遍ナクナシ
タルガ如シ時ニ午後九時

二十日〔木〕 午前再ビ香港ニ至リ Peak ニ登ル綱條
鐵道ニテ六十度位ノ勾配ノ急坂ヲ引キ上ル驚ク許ナリ

頂上ヨリ見渡セバ非常ナ好景ナリ再ビ車ニテ歸ル心地
惡キ位急ナ處ヲ車ニテ下ル歸船午後四時出帆

二十一日〔金〕 晴

二十二日〔土〕 曇 午時香港ヨリ海上六百四十一哩
ノ處ヲ行ク

二十三日〔日〕 無事 今日日曜ニテ二等室ノ宣教師
ハ例ノ如ク歌ヲ唱ヒ說教ス上等ノ甲板ニモ獨乙人ガ喧
嘩ヲスル様ナ說教ヲシテ居ル

二十四日〔月〕 胃惡ク腹下リテ心地惡シ今夜十時頃
シンガポールニ着ク筈ナリ

二十五日〔火〕 味爽シンガポール着頗ル熱キ處ト覺
悟セシニ非常ニ涼シクシテ東京ノ九月末位ナリ尤モ曇

天ナリ 土人丸木ヲクリタル舟ニ乘リテ船側ヲ徘徊ス
船客錢ヲ海中ニ投ズレバ海中ニ躍入ツテ之ヲ拾フ

土人ニテ日本語ヲ操ル者日本旅館松尾某ノ引札ヲ持
シテ至ル命ジテ馬車二臺ヲ二圓五十錢宛ニテ雇ハシメ
植物園ニ至ル熱帶地方ノ植物青々トシテ頗ル美事ナリ
又虎蛇鰐魚ヲ看ル、Conservatoryアリ夫ヨリ博物館
ヲ見ル餘リ立派ナラズ歸途松島ニ至リ午飯ヲ喫ス此處
日本町ト見エテ醜業婦街上ヲ徘徊ス妙ナ風ナリ午後三
時再ビ馬車ヲ驅ツテ船ニ歸ル三時半ナリ

二十六日〔水〕 涼

二十七日〔木〕 朝ペナン着 午前九時ノ出帆故上陸
スルヲ得ズ雨フル十時頃晴ル

二十八日〔金〕 雨

二十九日〔土〕曇 印度洋ト雖甲板ハ風烈シク寒
キ位ナリ

三十日〔日〕無事

十月一日〔月〕十二時頃コロンボ着 黒奴夥多船中
ニ入込來リ口々ニ客ヲ引ク頗ル煩ハシ中ニ日本ノ舊遊
者ノ名刺又ハ推舉狀様ノモノヲ出シテ案内セント云フ
者二三アリ其一人ハ誘ハレテ上陸 British India
Hotelト云フ處ニ至ル結構大ナラズ中流以下ノ旅館ナ
リ

馬車ヲ驅ツテ佛ノ寺ヲ見ル^原砂利塔アリ塔上ニ鏤メタ
ルハ moonstone ナリト云フ舊跡ト雖年々手ヲ入ル
ハガ爲メ毫モ見ルニ足ル者ナシ且構造モ頗ル粗末ナリ
路上ノ土人花ヲ車中ニ投ジテ錢ヲ乞フ且 Japan, Ja-
pan ト叫ンデ錢ヲ求ム甚ダ煩ハシ佛ノ寺内尤モ烈シ
一少女錢ハ入ラヌカラ是非此花ヲ取レト強乞シテ已マ

ズ不得已之ヲ取レバ後ヨリ直グニ金ヲ吳レト逼ル亡國
ノ民ハ下等ナ者ナリ

「バナハ」、「コハ」ノ木ニ熟セル様ヲ見ル頗ル見事
ナリ道路ノ整ヘル樹木ノ青々タル芝原ノ見事ナル固ヨ
リ日本ノ比ニアラズ

六時半旅館ニ歸リテ晚餐ニ名物ノ「ライス」^原カレヲ
喫シテ歸船ス案内ノ印度人頗ル接待ニ勉メタリト雖後
ニテ書ツケヲ見ルニ隨分非常ノ高價ナリ案内料ハ 10
Rubies ^元ハテ馬車ハ一臺ハテ 20 Rubies ^元ナリ馬車賃ノ
如キハ明カニ規則違反ナリ然レモ不知案内ノ旅客ナレ
バ言ガマ、ニ錢ヲ與ヘ且推舉狀迄書テヤルハ馬鹿ゲタ
ルノミナラズ且後來日本ヨリ遊覽ノ人ニ對シテ甚ダ氣
ノ毒ノ至リ我等此馬鹿氣タルコト氣ノ毒ナコヲシタル
一行ナリ

十月二日〔火〕朝ヨリ驟雨來ル 甲板上ニ印度ノ手
間師來リ連リニ戲ヲ演ズ日本ノ豆藏ト大同小異ナリ只

ザルノ中ヨリコブラヲ出シテ手足ニ纏ヒツケル様恰モ
手間師ト豆藏トヲ兼タルガ如シ、且 Standard Dic-
tionary 中ニアルコブラノ畫ト同一ナリ

十月三日〔水〕 晴 無事

十月四日〔木〕 午前 甲板ノ椅子ニ踞シテ讀書ス突
然女ノ聲ニテ夏目サント呼ブ者アリ驚テ見レバ Mrs.
Nott ナリ此方ヨリ上等室ニ訪問セザル故向ヨリ來リ
タリト云明日午後茶ニ來レトテ分レタリ

十月五日〔金〕 午後三時半 Mrs. Nott ヲ一等室ニ
訪フ女子ハ非常ナ御世辭上手ナリ諸人ニ紹介セラル然
レモ一モ其名ヲ記憶セズ且誰ニモ我英語ニ巧ミナリト
テ稱贊セラル赤面ノ至ナリ女子ハ音調低ク且一種ノ早
口ニテ日本人ト云フ容赦ナク聽取ニク、シテ閉口ナリ
無暗ナ挨拶ヲスレバ危險ナリ恐縮セリ色々ナ談話ヲナ

シ且英國着後紹介狀ノ様ナ者ヲ頼ミテ歸ル五時半

十月六日〔土〕 此二三日風波頗ル穩ナリ今朝ハ殊ニ
靜カニテ恰モ鏡上ヲ行クガ如シ印度洋モ存外ナ者ナリ、
手紙ヲ故郷ニヤラント思ヘドモ面倒ナリ

雲ノ峰風ナキ海ヲ渡リけり
午後大魚無數波間ニ躍ルヲ見ル

十月七日〔日〕 滿月ニテ非常ニ美シ

十月八日〔月〕 今日國ヲ出テヨリ一月目ナリ午後
Aden ニ着ク筈ナリ夜 Aden ニ着ス

十月九日〔火〕 猶 Aden ニ泊ス

見渡セバ不毛ノ禿山巒岬トシテ景色頗ル奇怪ナリ十
時頃出帆始メテ亞弗利加ノ土人ヲ見ルロシヤナ佛ノ頭
ノ本家ハ玆ニアリト信ズ

十月十日〔水〕昨夜 Babelmandeb 海峡ヲ過ギテ
紅海ニ入ル始メテ熱ヲ感ズ此夜上等室ニテ ball ノ催
アリ御苦勞千萬ノ事ナリ cabin ニ入り寢ニ就ク熱名
狀スベカラズ

赤き日の海に落込む暑かな

海やけて日は紅に〔以下なし〕

日は落ちて海の底より暑かな

十月十一日〔木〕昨夜 cabin ニ入りテ寢ニ就ク熱
苦シクテ名狀スベカラズ流汗淋漓生タル心地ナシ此夜
又然リ明方ヨリ漸ク涼

十月十二日〔金〕秋氣漸ク多シ然レモ船客未ダ白衣
ヲ脱セズ「スエス」以北ニ至ラ始メテ寒カラン夜
Sinai ノ山ヲ右岸ニ見ル月未ダ上ラザリシ爲メ雲カ陸
カ見分難カリシ

十月十三日〔土〕朝九時頃「スエス」ニ着ス滿目突
兀トシテ一草一木ナシ是ヨリ運河ニ入ル「スエス」ニ
テ London Times 及二三種ノ雜誌ヲ買フニ伊藤山縣
ノ寫眞ノアル者アリ又本邦内閣ノ交迭ヲ記ス

十月十四日〔日〕Port Said ニ着ス午前八時出帆是
ヨリ地中海ニ入ル秋氣滿目船客ノ多數ハ白衣ヲ捨ツ中
ニハ白ノ上ニ外套抔ヲツケタルアリ頗ル奇

十月十五日〔月〕Bible ノ exposition ヲ聞ク夜
Doctor Wilson ト談話ス

十月十六日〔火〕海荒レテ氣色惡シ

十月十七日〔水〕Exposition ヲ聞ク

薄暮 Naples ニ着ス König Albert ハ今夜十時ノ發

ニテ横濱ニ向フ松本亦太郎始メ四五人ノ本邦人此内ニ
アリ二三町ヲ隔テ、相泊ス呼ベバ應セント欲ス然レモ
我船如何ナル故ニヤ上陸ヲ許サズ從ツテ友人ヲ見ルヲ
得ズ残念ナリ

十月十八日〔木〕Naples 上陸シテ cathedrals ヲ
見シ museum 及 Arcade Royal Palace ヲ見物ス寺
院ハ頗ル壯嚴ニテ立派ナル博物館ニハ有名ナル大理石
ノ彫刻無數陳列セリ且 Pompey^{site}ノ發掘物非常ニ多シ
Royal Palace モ頗ル美ナリ道路ハ皆石ヲ以テ敷キツ
メタリ此地ハ西洋ニ來テ始メテ上陸セル地故夫程驚キ
タリ

十月十九日〔金〕午後二時頃 Genoa ニ着ス丘陵ヲ
負ヒテ造ラレタル立派ナル市街ナリ 薄暮上陸 Grand
Hotel ニ着ス宏壯ナル者ナリ生レテ始メテ斯様ナル家
ニ宿セリ、食事後案内ヲ頼ミテ市中ヲ散歩ス

十月二十日〔土〕午前八時半ノ汽車ニテ Genoa ヲ
出發ス旅宿ノ馬車ニテ停車場ニ馳付タルハ立派ナリシ
ガ場内ニテ委細方角分ラズウロ々スル様洵ニ笑止ナリ
漸ク汽車到着セシガ乗車セントスレバドコ〔キ〕occu-
pied ト喧突ヲ喰フ途方ニ暮レタリ漸ク Cook ノ agent
ヲ見出シテ之ニ英語ヲ以テ頼ミシガヤガテ乗客滿員ノ
爲メ新列車ヲ増加シ漸ク之ニ乗込ミシガ Turin ニテ
乗易ル譯故氣ガ氣ニアラズ漸ク該所ニツキ停車場前ノ
旅館ニ至リ中食シ四時半ノ發車ヲ待チ合ス Genoa 上
陸以來一切無中ニテ引キ廻サル、如キ觀アリ見當違ノ
所ニ至ラザルガ仕合ナリトス

四時三十分頃旅屋ノ番頭ニ送られて汽車ニ乗る何處
モ occupied ト云ハレテ這入ルヲ得ズ五人離々ニナリ
テ漸ク乗込就中余ハ最後迄赤帽ニ引マハサレテ茫然ト
シテウロ々スルヲ多時漸ク毛唐人ノ内ニ割込ム皆キヨ
ロキヨロトシテ余ガ顔ヲ見ル此體裁ニテ Modane 迄

至ル茲所ニテ荷物ヲ検査シテ佛ノ國境ニ入ルト云フ故此處ニ至リ見ルニ手荷物ヲ持チテ下リルコト心得テ車ヲ飛び出セバ豈計ランヤデ検査官ガ車中ニ來リテ検査スト云フニ倉皇引キ返セバ知ラヌ奴ガ我物顔ニ自分ノ席ヲ占メテ居ル故此ハ我席ナリト英語デ云ヘバ佛語ニテ君ハ何モ置テ行カヌ故此ニ座シタルナリト威張ツテ入レズ已ヲ得ズ藤代氏ノ席ノ處ニ至リ廊下ニ佇立スルニ車掌ノ如キ者來リ次ノ部屋ヲ指シ連リニ分ラヌコトヲ兎角申ス故ノゾキ見レバ八人定員ノ處ニ一ノ空席アリ是幸ヒト座ヲ占ムレバ同席ノ一行六人連ノ奴原連リニ何カ吾ヲ罵ル様子ナリ然此方モ負ヌ氣ニテ馬耳東風ト聞キ流スカクシテ東方ノ白ム頃迄ハヤリ通シ八時頃漸ク「パリス」ニ着ス停車場ヲ出デ、見レバ丸デ西モ東モ分ラズ恐縮ノ體ナリ巡查如キ者ヲ捕ヘテ藤代氏船中ニテ一夜造リニ強強シタル佛語ニテ何カ云フニ親切ナル人ニテ馬車ヲ雇ヒ吳レテ正木氏ノ宿所迄送り届シ吳タリ正木氏英國旅行中ニテ會ハズ渡邊氏アリ朝食ト晝

食ノ馳走ヲ受ク佛人ト會食セルハ是ガ始メテナリ食後停車場ニ至リ再ビ荷物ヲ受取り返ル晚餐ヲ料〔理〕店ニ食ニ行ク美人アリテ英語ヲ話ス夜 Nodier 夫人ノ家ニ歸リテ宿ス是ハ渡邊氏ノ周旋ニテ借りタルモノナリ

十月二十二日〔月〕 十時頃ヨリ公使館ニ至リ安達氏ヲ訪フアラズ其寓居ヲ尋ねしが又遇ハズ淺井忠氏ヲ尋子シモ是亦不在ニテ不得已歸宿午後二時ヨリ渡邊氏ノ案内ニテ博覽會ヲ觀ル規模宏大ニテ二日ヤ三日ニテ容易ニ觀盡セルモノニアラズ方角サヘ分ラヌ位ナリ「エヘル」塔ノ上リテ歸路渡邊氏方ニテ晚餐ヲ喫ス其ヨリ Grand Boulevard^原ニ至リテ繁華ノ様ヲ目撃ス其狀態ハ夏夜ノ銀座ノ景色ヲ五十倍位立派ニシタル者ナリ

十月二十三日〔火〕 朝樋口氏來ル晝食ヲ喫ス岡本氏來ル日本食ノ晚餐ヲ喫ス夫モリ Music House^原ニ至リ又 Underground Hall^原ニ至ル歸宅ス午前三時歸宅ス

巴理ノ繁華ト墮落ハ驚クベキモノナリ

十月二十四日〔水〕 十二時半ヨリ安達氏方ニ赴キ晝飯ノ饗應アリ六時頃歸宅宿ニテ晚餐ヲ喫ス就寢

十月二十五日〔木〕 渡邊氏ヲ訪フ夫ヨリ博覽會ニ行ク美術館ヲ覽ル宏大ニテ覽盡セ^原ズ日本ノハ尤モマツシ

十月二十六日〔金〕 朝淺井忠氏ヲ訪フ夫ヨリ芳賀藤代ニ氏ト同ジク散歩ス雨ヲ衝テ還ル樋口氏來ル

十月二十七日〔土〕 博覽會ヲ覽ル日本ノ陶器西陣織尤モ異彩ヲ放ツ

十月二十八日〔日〕 巴理ヲ發シ倫敦ニ至ル船中風多シテ苦シ晩ニ倫敦ニ着ス

十月二十九日〔月〕 岡田氏ノ用事ノ爲め倫敦^原市中ニ歩行ス方角モ何モ分ラズ且南亞ヨリ歸ル義勇兵歡迎ノ爲メ非常ノ雜沓ニテ困却セリ夜美野部^原氏ト市中雜沓ノ中ヲ散歩ス

十月三十日〔火〕 公使館ニ至リ松井氏ニ面會 Mrs. Nott ヨリノ書狀電信ヲ受ク

十月三十一日〔水〕 ^{*}Tower Bridge, London Bridge, Tower, Monument ヲ見ル夜美野部^原氏ト Haymarket Theatre ヲ見ル Sheridan ノ The School for Scandal ナリ

十一月一日〔木〕 十二時四十分ノ瀛車ニテ Cambridge ニ至リ ^{*}Andrews 氏ヲ訪フ同大學ノ様子ヲ知ランガ爲ナリ二時着同氏不在四時ニ歸宅スト云フ即ち